

2016 CSR 報告書







平素は格別のお引き立てを賜わり厚く御礼申し上げます。
CSR 報告書も第3号となりました。企業にとって決算は
もちろん大事な節目ではありますが、毎年11月に発行す
るこの CSR 報告書も、私たちにとっては大事な節目のひ
とつになってきました。

今年の活動をひと言でいえば「教育」です。約20年ぶり
に新卒の新入社員を迎え、彼らのこれからの人生に責任を
感じつつ、社員教育に注力しました。

また、地元小中学校や横浜市教育委員会と連携して、子供
たちの学びを支援する活動にも例年以上に力を入れて取
り組んできました。将来に不安を抱く若者が増えている昨
今、大人になることや働くことは、君たちの夢を叶えるこ
とであり、楽しいことなんだということを伝えたくて、た
くさんの子供たちと交流しました。

こうして私たちの活動をご報告できますのも、偏にご支
援・ご協力いただきました皆様のご厚情の賜と心より感謝
申し上げます。

毎年 CSR 報告書を発行するたびに我が身の至らなさに直
面し、汗顔の至りではありますが、是非本書をご一読いた
だき、忌憚のないご意見、ご質問、叱咤激励など賜われれ
ば幸いです。

2016年11月

株式会社協進印刷

代表取締役社長 江森克治

CONTENTS

- 3 特別対談 山本朝彦 × 江森克治
地域まるごとの教育へ 横浜から始まる「学校の脱学校化」
- 10 CSR 取り組み報告
- 11 コンプライアンス／情報セキュリティ
- 12 環境
- 13 品質
- 14 雇用・労働安全
- 15 社会貢献・地域志向
- 17 情報開示・コミュニケーション
協働事業報告
- 18 ぼうさいえほんプロジェクト
- 19 タツミのえほん部プロジェクト
- 20 1年生プロジェクト
- 21 第三者評価
- 22 各種認定

特別対談

西が岡小学校校長

株式会社協進印刷

山本朝彦×江森克治



地域まるごとの教育へ
横浜から始まる「学校の脱学校化」



いま、学校で何が起きているのか

江森：2014年に初めてのCSR報告書を発行したのですが、そのときの特別対談は横浜市政策局の関口さんと、哲学者のイヴァン・イリッチの著書『脱学校の社会』を切り口にしたものでした。これはもちろん学校そのものへの批判ではなく、学校にさえ通っていれば立派な人間になれると勘違いしてしまうようなこと、つまり誰かが構築した〈制度〉に乗っかっていさえすれば大丈夫なんだと思い込んでしまうような現象を「学校化」と表現して、現代

社会の至る所で進行している「学校化」をどう食い止めていくのかについて、関口さんの考え方や取り組みについて伺ったものでした。

昨年からは横浜市の「地域キャリア教育支援協議会」で山本先生をはじめとする学校関係者や地域で子供の教育に携わっている方々といろいろと勉強させていただき、山本先生が校長をしていらっしゃる横浜市立西が岡小学校では授業も見せていただいたりという経験を経て、もしかしたらキャリア教育（横浜市でいうところの「自分づくり教育」）というのは、学校を脱学校化していく

試みなのではないかとの考えがふと浮かんできて、これは一度現場の先生のご意見を聞いてみなくてはということで、今回山本先生にお時間をいただいたというわけです。

学校はいまどのような状況になっているのでしょうか。

山本：私が一番危惧しているのは、今まさに江森さんが言ってくれたように、「学校教育」そのものがサービス業であると勘違いしている人たちが、いかに増えてきているかということです。水道の蛇口をひねれば水が出るように、電車が時間通りに走るように、それと同じように教育を受けられると考える。もっといえば、水道水は自分の家でも隣の家でも同じ質の水が出る、地下鉄は誰が乗っても同じ場所に同じ時間で連れて行ってくれる、だから教育もどこの学校に行っても誰もが同じ質の教育を受けられるのが当たり前、だって税金払ってるんだからという考え方が社会に蔓延していると思います。

しかし本来の教育というのはそのような考え方とは逆のところにあって、すべての生徒に同じ教育プログラムを提供することが公平なのではなくて、能力や才能に違いのあるひとり一人の生徒に対して、大小はあるにせよ一定期間で必ず成長させますというところが公平であると考えerわけです。もちろん生徒ごとに成長の幅やスピードは違いますので、教育の手法や成果は違ってくる。でも必ず公平に育てますというのが、公教育なんですね。学校でもこのことを説明するには結構苦労しています。

江森：それは容易に想像できますし、ご苦労もかなりのものだとお察ししますが（笑）、一方で、学校が世間を誤解させてしまったという側面もあるではないでしょうか。

山本：それはあると思いますね。かつては、それは経済界からの要請があったわけですが、学校というのは社会に出るための準備期間として、教師から一定の負荷をかけられて、その理不尽な要求に耐えて乗り越える訓練をすることで、社会に出てからも辛抱

強く働くことができる人を育てていましたし、それによって一定の質の人材を輩出することができて、それが時代的にもマッチしていたということですね。もちろん今は経済界もそんな人材は望んでいないのですが、そのあたりのギャップは大きく影響していると思いますね。

江森：国が示している教育の方向性、育てようとしている人材の姿というのは妥当性のあるものだとお考えですか。

山本：ひとつターニングポイントは、総合的学習や生活科が始まったときだったと思います。それまでの教師から知識を授けられるという意味での「授業」から、生徒自らが生活の中から課題を見つけ、解決方法を考え、その課題に働きかけていく「学び」という教育方法になったわけですね。

この度改訂された次期の学習指導要領にも「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう態度や人間性」を身につけさせることが明記されましたので、社会の要請に沿ったものにはなっていると思いますね。

プロセスを評価することへの試行錯誤

江森：先日西が岡小学校の授業を見せていただいて、私たちのころとは全然違う、まさに子供の自立を助けるための授業が展開されていると感じました。生徒は他の人の意見をきちんと聞いた上で、自分の意見を正々堂々と述べることができるし、またその意見をクラスみんなが尊重していることが伝わってきて、とても驚きました。これが国も学校も目指している教育の、ある意味先駆的な事例だとすれば、一体全体どこでおかしくなるのか？私には、中学、高校と大学が近くにつれて、だんだん教育の質が悪くなっているような気がします。結局は大学入試がボトルネックなのではないでしょうか。



山本:その可能性は高いと思いますが、実際には大学入試にしても、あれだけの人数を数日で選別し、さらに公平性を担保するとなると、一人一人時間をかけて試験をやるわけにはいかないでしょうね。そのあたりをどう変えていくかということでしょう。

江森:日本の場合、教育の成果というのは、とかく偏差値の高い学校に進学できたかどうかで計られている気がするのですが、本来は教師と生徒がある一定の時間を共に過ごす中で、お互いに向き合いながら生徒がこれからの人生を生きていくために必要な力をつけていくということで、何かをすればそれでOKという魔法のような話ではないと思うのです。だからたとえダメな先生のクラスになったとしても、そのダメな先生に付き合う1年間というのは、子供にとってまったく無益ということではなく、それはそれでたくさん学びがあるはずなのです。本来学校にはソリューションを求めるべきではないと思うのですが、こうすればうまくいく、こうすれば幸せになれるというソリューションを提供してくれるところと勘違いしている人が多いように思います。これはたぶん、教育を受ける側、教育を提供する側両方に言えることだ

と思いますが。

山本:明治以来の学校教育というのがそういうものだったからだと思います。当時は学校に行けば最先端の知識が手に入り、そこで習った読み書きそろばんは将来必ず役に立つという、そういうところからの出発だったのです。

確かに目に見える力というのは、とてもわかりやすいし、親も喜ぶし子供も喜ぶ。例えば体育で、泳げない子が泳げるようになる。逆上がりできない子ができるようになる。その「～できる」という言葉は教師にとってもわかりやすいし、成果を実感できることなんですよ。

それが時代が変わって、今はそれだけじゃない、それこそ目に見えない力をつけてくれということになったときに、もちろん保護者も不安になったけれど、一番不安になったのは教師自身だったのだと思います。結局見に見えない力というのは、それが身に付いたかどうかをどうやって計るか、またどうやって証明するかが問題になるわけですが、その方法もエビデンスも確立していないのに、それでもやれといわれて試行錯誤してきたのが、ここ数年の学校現場です。

もちろんある一定の成果を求めていかなければならない分野もありますが、特に義務教育においては成果よりは過程が大事であるのは間違いありません。問題はその過程を評価する仕組みが不十分であり、過程を評価することの意味が保護者なり社会に対して十分に説明がなされていないということでしょうね。

それだけに、これからは学校の「見える化」が大事になってきます。これまでは見えることしかやってこなかったものが、見えないものを扱うようになったことによって、文字通り「見えなく」なってしまったわけです。それをいかに「見える化」していくか、それにはICTはなくてはならないでしょうね。

江森:具体的にはどうということですか？

山本：例えば一部の学校ではタブレットを使った授業をしていますが、タブレットを使うことによって、生徒ひとり一人の思考のプロセスや試行錯誤の過程が見えますし、エビデンスとして残すことができます。それを保護者と共有して、こんなふうがんばったとか、こんなに成長できた、という過程について共感できれば、保護者の評価観も変わってくるのではないかと思います。

「不安な社会」で自立していくということ

江森：かつてのように有名大学に行って一流企業に入ることが幸せとは限らない、もちろん行きたい人は行けばいいわけですが、それが一生の幸せを担保するものではあり得ないということは、現代ではほぼ合意された事実だと思うのですが、それでも親は子供を塾に通わせて有名大学を目指させるわけですよね。この現象を教育現場としてはどう捉えていますか？

山本：「自立」という言葉の裏側には、すごくたくさんの体験や試行錯誤の中で、子供自身が知識や能力を獲得していくというプロセスがあると思うのですが、今はそれが待てない、すぐに結果を求めたがる時代になってきているというのは感じます。そういう風潮の中で、親の立場に立ったときに、いろいろな体験をして、試行錯誤をして、その結果どうなるかわからないけど、まあ小学校6年間はそれでいいやって、なかなか割り切れないんだと思います。塾に通わせたり、何か習い事をしたり、まあせめてサッカーぐらいはさせてとかね。

江森：サッカーのプロ選手なんてそれこそほんの一握りしかありませんけどね。それでもやらないよりはマシだということかな。

山本：その背景にあるのは「不安」なんだと思いますね。老後・定年後のキャリア・貯金…。そんな不安の中のひとつが「子供」で、せっせと貯金をするのと同じように、子供に何かさせておいた方

が、いくらかでも安心していられるということではないでしょうか。

江森：不安を取り除くのは、結局は毎日毎日の自分自身の行動、経験の積み重ねでしかない。それを学歴や会社の知名度や、ある意味資格というのもそういう側面があると思いますが、そういうものに頼るというのは、どうも他力本願というか、まさに「自立」できていないような気がしてなりません。

山本：本当は自分自身が力をつけて、どんな状況になっても「たぶんやっていけるんじゃないか」という自らの力を感じられれば、そんなに不安がることもないし、不安にも感じないんだと思うんですよね。そういう力が育てられずにきてしまったところはあるのかなと思いますね。これは親に限らず、教員自身もたぶんそうなのです。教員もある意味エリートというか、しかるべき大学を出て、資格試験に合格して、そういう価値観の中で生きてきていますから、そこから一歩外に出てみようとか、一歩外に出た世界を子供たちに見せようとか、なかなか考えられないですよ。

だからこそ様々な価値観や、様々なキャリアをもった人たちが、



子供に関わるべきだと思うんですよ。それがまさにキャリア教育ということだし、それは子供たちだけでなく、教員にとっても親にとっても大事な学びの機会になると思っています。

江森：大人が不安なんです…。もともと子供には不安なんてないですからね(笑)。先生方も同じように不安だということですね。

山本：最近の学校の先生方を見てると朝早くから夜は9時10時まで仕事して、なんだか高速道路をアクセル踏みっぱなしで走ってみたいで、そんなんじゃいつか事故を起こすのではないかと心配になります。たまにはサービスエリアで休んで居眠りしたり、高速を下りて脇道を走ってみたり、むしろその方が得られるものもあるのではないかと思いますけどねえ。



江森：政府でも働き方改革が中心テーマにあがっているぐらいですから、先生が有給休暇使って学校休んでテーマパークに行ったりしてもいいと思いますけど、現状では見つからずいぶん叩かれるんでしょうね（笑）。

山本：それはもう大変でしょう（笑）。でも横浜市では4年前から夏休み期間中の2週間を学校閉庁日として、長期の休みが取りやすい環境を作っているんですよ。もちろん出勤している先生もいるのですが、外部からの問い合わせには対応しないということにしているので、休みをとって旅行に行く先生もいますね。最初は内外から反対も多かったのですが、最近では8割程度の小学校が実施するようになりました。

江森：その期間は是非有意義に使って欲しいですね。先生のその経験は全部子供たちに還ってくることでしょうから。

山本：横浜市内にも地域によっては外国籍の子供の割合が多い学校があるのですが、その学校では閉庁期間には海外に行くことを強く勧めているそうです。

江森：考えてみれば、先生が学校と家の往復で、外の世界を知らないというのは、とても不健全なことですよ。

山本：私が教員になりたての頃は、まだまだ「休まないことが正義」みたいな価値観があって、当然私も有給休暇なんて使うものか！と思っていたんですよ（笑）。ところが30代になって教育委員会の事務局に転勤になり、そのとき平日の昼間の街というのを初めて見たのですが、いかにたくさんの方がゆっくりと時間をかけて昼ごはんを食べているかということに衝撃を受けましたね。わあ、昼からワイン飲んでる、日本で豊かなんだなって（笑）

「学校の脱学校化」社会に開かれた学校へ

江森：先生方には是非たくさん経験をして、一人の人間として魅力的になっていってもらいたいと思いますが、だからといってそれで教育に必要なすべてがまかなえるわけではない。やはりこれからは、学校の中にはないリソースをいかにうまく学校の中に取り込んで活用できるかということが問われると思います。

山本：それはまさに国が今回の中教審で「社会に開かれた学校に」とうたっているのですが、これには3つあって、1つは「社会に理解される」ということ。今までは学校自体がブラックボックスで、中で何が行われているかわからないところがありましたが、これからはどんどん情報発信して、まずは理解をしていただいた上で、協力してくれる人を増やしていくということです。

2つめは「社会につながっている」ということ。学校で身につけたことが、高校入試や大学入試で終わってしまうのではなく、社会に出てからも役に立つ力でなければならないし、その力をいかにつけるかということです。

3つめは「学校・保護者・地域など社会みんなで子供を育てる」ということ。結果的にはそうやって育った子供たちは、自分が地



域のみんなに育てられたということを実感するでしょうし、自分の子供もこの地域で育てたいと思うようになるでしょう。そうやって新しい地域と人の循環が生まれてくるのだと思います。学校が社会に開かれていくということが、まさに今日のテーマでもあるこれからの「脱学校」ということなんじゃないかと思います。

江森：そうなるとう度はこちの問題なのですが、先生がおっしゃった「みんな」の中には当然企業も含まれていて、自分たちには関係ないなんて顔していないで、企業ももっと教育に積極的に関わっていくべきなのです。しかし実際には、どうも縄張り意識が強いのか、当事者意識が弱いのか、企業は仕事だけやっていたらいいという意識が、企業人だけでなく社会全体として根強いと思うんですね。ここは何かみんなが子供の教育にコミットできる仕組みが必要で、私はまずは「条例」を作ることだと前から考えています。条例ができると役所の動きが変わります。まずは役所が変わる、例えば経済局が子供の教育に関わるというようなことですが、そうすることによってだんだんと社会全体の意識が変わっていくのではないかと思います。

学校・地域・企業…それぞれの強みを活かして

江森：ところで山本先生の教育者としての理想とは何ですか。

山本：教育というのはつまる所、いかに個人を自立させられるかという点にかかっていると思うんですね。そのためには「教授する」というところから脱却して、ひとり一人が自分自身で「学んでいく」という仕組みをいかにつくるかということだと思います。そのために、人とつながる、社会とつながるということをやっけていこうとしています。人に対して興味関心を持てるのが、特に初等教育においては必須のことだと思っています。少し前にはニートであろうと引きこもりであろうと、自分らしく生きていけばそれで良いとされた考え方もありましたが、いくら能力があっても、それを認めてくれる社会に関わることができなければ、その能力は活かせないわけで、人とつながる、社会とつながることが、自立を促していくことだと思います。

もうひとつは、いまの時代はこれだけ情報があふれていて、それを受け取るツールもたくさんあるけれど、果たして私たちの視

野は広がっているのかなという疑問があるのです。子供たちに感じ取って欲しいのは、世の中には本当に多様な価値観や文化があって、そういう自分とは違う価値観や文化をもった人たちと対話を重ねながら、いかに持続可能な社会を作っていくかという、それに尽きると思いますね。

一般的にコミュニケーション能力というと、やたら声が大きくて、バンバン意見を言う人がコミュニケーション能力が高い人と思われている節がありますが、本当のコミュニケーション能力というのは、文化が違う、価値観が違う、性格が違うというような人たちと対話をしながら、その人の目線まで自分が降りていって、相手の土俵で自分の考えなり、伝えたいことを伝えられるということだと思ふんですよ。

江森：私も自分自身は教育者だと思っているのです。会社の中で若い社員をいかに自立させるかということは常に考えていますし、彼らが自立してくれることが会社のためにもなり、彼ら自身の人生の豊かさにもつながっていて、彼らが幸せな人生を歩んでくれることが、私にとってのひとつの成功だと考えています。しかし私はそれでお金をもらっているわけではないので、教育に関しては素人なわけです。私は学校教育には学校の先生だけでなく、市民も企業もオール地域で臨むべきだと考えていますが、となるといっそう際立ってくるのが、じゃあ教育のプロである学校の先生は、私たち素人と何が違うのかということなのですが、教育のプロと素人の差は何ですか？

山本：私が考えるプロの教師というのは、まったく興味も関心もないところに、あたかも子供が自分自身で興味をもったかのように関わらせてあげられる技術をもった教師のことだと思います。もちろんこちらとしては、ねらいもあるし、こういうものを身につけさせたいと思って授業を組み立てるわけですが、子供たちから見たときに、自分自身で気づいて、自分自身で課題を発見・解

決し、自分自身で力を獲得したという、そういうプロセスを踏ませてあげられるというのが、本当のプロだと思いますね。

江森：企業でもいわゆる「やらされ感」というのは本当にダメで、ロクな結果にならないわけですが、自分で気づいたかのように持って行くというのは本当に難しい。なるほどプロの技というのはそこにあるのですね。

昨年からキャリア教育支援協議会に参加させていただいて、一番感じるのは、学校の教育ノウハウのすごさです。当たり前といえば当たり前なのかもしれませんが、会社で日々部下の教育に頭を悩ませている立場からすると、このノウハウは是非民間で活用させて欲しいと思います。しかも全国津々浦々こんなに近くに、すごい教育ノウハウを持った先生がたくさんいるわけです。これは我が国の財産ですよ！俺たちには使わせてもらえないのか？と真剣に思います。

山本：逆に学校には資源活用とか、それこそマネジメントなんていうノウハウは不足しているんですよ。なにしろ学校はほとんどが先生ですからね（笑）。民間の方たちと、そういったノウハウの交換ができると企業と学校との交流が益々進むと思いますね。

江森：それは素晴らしいアイデアですね！「子供を育てる」という大きな目的を共有しつつ、お互いの業務に必要な情報やノウハウを交換するという「実利」の部分もあると、キャリア教育を軸にした本当の意味での連携が実現するように思います。これからもよりよい社会の実現に向けて、連携を強めていきたいですね。

Profile

山本朝彦さん

横浜市立西が岡小学校校長

大学卒業後教員となり、横浜市立大岡小学校に勤める。その後、山元小学校、山下みどり台小学校を経て、横浜市教育委員会事務局 教育政策課主任指導主事。

2015年より現職。

CSR取り組み報告

2016年度の主な取り組みについて次ページより報告します。取り組みは全印工連CSR認定制度で規定されている8つのCSR項目に従って分類されており、右上にカテゴリーを表示しています。

CSR基本方針

株式会社協進印刷全社員は、自らが地域社会の主体であるとの自覚のもと、地域社会および地域経済の重要性を認識し、ステークホルダーからの期待に応え、本方針に基づき本業を通じて社会の持続的発展に貢献することを約束いたします。

本業を通じた社会への貢献

進取の精神と不断の努力により培われた技術力を基盤として、誰もが安全かつ便利に利用できる良質な製品・サービスをお客様に提供することにより、人びとの心と心が通い合う優しさ溢れる社会の実現に貢献します。

環境保護活動の推進

持続可能な社会の実現に向けて、全ての事業活動において環境に与える負荷の低減を目指します。また環境対応製品の製造を通じて、環境保護への啓蒙活動を推進します。

社会貢献活動の推進

共に地域に暮らす市民として、地域住民との信頼関係を構築し、文化芸術振興および青少年育成に重点をおいた社会貢献活動を積極的に推進します。

働きやすい職場作り

働くこととは公に奉仕することであるとの認識のもと、地域住民を積極的に雇用し、全ての社員にとって、働きやすい、やりがいのある職場作りに努めると共に、意欲ある社員の豊かな人生を応援します。

法令遵守

法治国家における責任ある市民の一員として、事業活動における各種法令の把握に努め、それらを遵守します。

継続的改善による取り組みのレベルアップ

毎年度当初にステークホルダーニーズの析出を実施し、経営と一体化したCSRの目的および目標を定め、マネジメント・システムの運用を通じて改善の努力を継続します。

2014年8月改定

実効性のあるコンプライアンスを

法令遵守は〈言うは易し行は難し〉の典型。特に法務の専任者を配置する余裕のない中小企業にとっては、自社が遵守すべき法令をすべて把握することすら現実的には困難です。その困難に挑戦すべく、環境 MS 以外は認定制度の更新ごとに実施していた適用法令の見直しを、すべての MS において最長で隔月へと短縮しました。口先だけで終わらない実効性のあるコンプライアンスを目指します。

保護情報管理システムを一部 IT 化

情報セキュリティ管理システムの一部を IT 化し、個人情報等保護すべき情報が含まれている案件かどうか、また製造時に発生する余剰材が適切に廃棄されたかどうかを、一覧で全員が共有できるようにしました。これによって保護情報取り扱いの履歴を一元管理できるようになったことに加え、個人個人の理解度の違いによって起こり得る「意図せざるミス」の防止につながることが期待されます。

適用法令見直し周期の改定

MS	項目	改定前	改定後
環境	環 境	毎月	毎月
	労 働 安 全	2 年	毎月
情報	個 人 情 報 保 護	2 年	隔月
	情 報 セ キ ュ リ テ ィ	2 年	隔月
	知 的 財 産	2 年	隔月
CSR	雇 用	1 年	毎月
	税 制	毎月	毎月
	そ の 他	2 年	毎月

For actual compliance

Compliance is a model of “easier said than done.” Especially, for small and medium-sized companies that cannot afford to employ a legal instructor, it is realistically difficult to understand all of laws that they should obey. We shortened the check of law bimonthly at all of management system except environmental that we used to do every renewal of authorization system. We try to practical compliance that isn't only a lip service.

Information protection management system is enhanced by IT technologies.

We enhanced information protection management system by IT technologies. So, staff all the members could share now whether the order include protection information, and whether surplus material was disposed of appropriately.

As a result, we can consolidate now the history of the protection information handling. And it's expected to lead to the prevention of “Unintentional mistake” which can happen by the difference in the intelligibility of the staff .

保護情報が含まれる案件を印刷日順に表示。廃棄前のものは赤色表示される。

環境

少しずつ丁寧に積み重ねています

～グリーンプリンティング更新認定取得

平成 19 年に取得した日本印刷産業連合会のグリーンプリンティング (GP) 認定制度の 4 回目となる更新審査を終え、6 月 16 日に認定を受けました。GP はグリーン購入法にも例示されている認定制度で、今回は労働環境やリスクコミュニケーションなども審査対象として追加されました。今後も近隣との友好的な関係を継続し、ひとつひとつ丁寧に取り組んでまいります。

かながわエコ 10 トライに参加

神奈川県環境農政局が推進している環境行動宣言「かながわエコ 10 トライ・マイエコ 10 宣言」。3R の拡大や環境コミュニケーションの充実、里山や森林を守るための活動、ステークホルダー向け環境セミナーの実施など、私たちの具体的な取り組み 10 項目を宣言しました。新しい宣言のおかげで、新たなつながりが出来ています。出会い、学びを大切にして、持続可能な社会の実現に向け宣言達成を目指します。



かながわエコ 10 トライの一環で実施した「3R」についての研修

We are stacking up carefully little by little.

~Getting updated qualification of Green Printing~

We got qualification of Green printing (GP) in Japan Federation Of Printing Industries 2007. June 16, 2016, we had been judged this qualification the fourth time and got updated one. GP is also illustrated by Law Of Green Procurement. This time, it added working conditions and risk communication as judging targets. We want to try to continue getting along with neighbors in a friendly way and work in the matter carefully one by one.

Kanagawa Eco 10 Declaration.

“Kanagawa Eco 10 Try my eco 10 declaration” is an environmental action declaration that Environmental And Agricultural administration department of Kanagawa prefecture promotes. We announced 10 concrete activities for example, expansion oh 3R, to fill environmental communication, activity to save local forest, to hold environmental seminar for stakeholders and so on. These new announcements help us making new connection. We try to achieve them for realization of sustainable society by cherishing meeting and learning.

2015 年度 CO₂ および産業廃棄物排出量・リサイクル量 (2015.4.1 ~ 2016.3.31)

排出

項目	排出量	前年比
CO ₂	22.2t	105.8%
廃油	0.32t	134.4%
廃アルカリ	0.1t	124.4%
廃プラ	0.07t	67.6%
金属くず	0.06t	120.0%
事業ゴミ	990ℓ	68.7%

リサイクル

項目	排出量	前年比
紙	10.3t	84.1%
アルミ	0.6t	106.8%

お客様の期待に応えるために

多様なサービスをご提供する中で、お客様からさまざまな反響を頂戴しています。多くの嬉しい声を頂いておりますが、中にはクレームやお叱りも受けます。そのようなお客様の貴重な声に真摯に向き合うため、お客様コミュニケーション履歴として書式化、毎週の全体会議で共有、改善案を協議、必要に応じて手順書の見直しなどを実施し、再発防止に努めています。

漢字学習・日本語学習を実施

「日本語のプロ」を目指し、今年度より全従業員に漢字検定または日本語検定取得を義務付けています。協進カレッジや女子カレッジの時間を利用し、漢字の先生を招き勉強に励んでいます。

品名	品番	品名	品番	品名	品番	品名	品番
10-21-2018	10-21-2018	10-21-2018	10-21-2018	10-21-2018	10-21-2018	10-21-2018	10-21-2018
10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018
10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018	10-23-2018
10-24-2018	10-24-2018	10-24-2018	10-24-2018	10-24-2018	10-24-2018	10-24-2018	10-24-2018
10-25-2018	10-25-2018	10-25-2018	10-25-2018	10-25-2018	10-25-2018	10-25-2018	10-25-2018
10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018
10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018	10-04-2018
08-30-2018	08-30-2018	08-30-2018	08-30-2018	08-30-2018	08-30-2018	08-30-2018	08-30-2018
08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018
08-23-2018	08-23-2018	08-23-2018	08-23-2018	08-23-2018	08-23-2018	08-23-2018	08-23-2018
08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018
08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018
08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018	08-27-2018
08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018	08-21-2018
08-04-2018	08-04-2018	08-04-2018	08-04-2018	08-04-2018	08-04-2018	08-04-2018	08-04-2018
08-01-2018	08-01-2018	08-01-2018	08-01-2018	08-01-2018	08-01-2018	08-01-2018	08-01-2018

社内クレームも社外クレームと同様に扱うことで改善スピードを向上させている

To respond to the customer's expectation.

Customers give us a lot of impact when we offer many kinds of services. Some of them are positive voices, but others are negative voices and complaints. We make an effort to prevent from recurrence for instance we make a form of communication record with customers, have a regular meeting once a week to share with workers, discuss the solution, and if it need for us, we revise procedure manual.

Studying kanji and Japanese.

We try for "professional of Japanese," so all workers have been obligated to get the official kanji exam for Japanese speakers or the Japanese language exam. We invite kanji instructor and we are studying hard at the time of "Kyoshin-collage" and "Jyoshi-collage" as a class for women.



雇用・労働安全

よこはまグッドバランス賞受賞

横浜市が積極的な女性活躍推進やワーク・ライフ・バランスの推進を図るために、市内の中小事業所を認定する「よこはまグッドバランス賞」を受賞しました。また、厚生労働省が従業員101人以上の企業に義務付けている一般事業主行動計画を策定し、労働局に届出しました。ワーク・ライフ・バランスの充実にむけ、半期ごとに週1回のマイノ残業 day と有給休暇の取得計画書を全従業員が作成し、取得率の向上に取り組んでいます。



We won "Yokohama good balance prize".

We won "Yokohama Good Design Prize" for middle and small-scale business, which try to promote active female employees and work-life balance. Moreover, we made General employer action plans, which the Ministry of Health, Labor and Welfare require companies that have over 101 employees to compose, and submitted to labor authority. All workers plan "My no overtime work day" (once in a week) and when we take paid vacation twice a year. That helps us getting it.

メイクレッスンを実施

新入社員には新人研修の一環として自分磨きとメイク入門、パートタイマーにはリフレッシュを目的として、外部講師を招き就業時間内で実施しました。自己流メイクではなく、正しいメイクの知識を得ることができ、学校行事や冠婚葬祭などのいざというときの手助けになることを期待しています。

A make-up lesson was put into effect.

We invited outside instructor and held makeup lesson. For freshmen, it means orientation, to polish oneself, and introduction to makeup. For part-time workers, it is equal to refreshment. We hope that it will help them at school event or ceremonial occasion because they can know correct knowledge, not self-education.



平成28年3月24日 於：横浜市開港記念会館



インターンシップ・出前授業の協力

今年も引き続き、インターンシップの受入れをしています。さらに市内中学校と高等学校で出前授業を実施。メディア・ユニバーサル・デザインや、「働く」という本質的なテーマについて熱いメッセージを伝え、子どもたちの将来を応援しています。

はまっ子未来カンパニープロジェクトに協力

横浜市教育委員会が推進する「自分づくり教育」の一環として今年度から実施しているキャリア教育プログラム「はまっ子未来カンパニープロジェクト」に協力しています。インターン・出前授業への協力から一歩踏み込んで、地元の横浜市立大口台小学校と一緒に授業を運営する側にまわり、4年生の子供たちの幅広い学びを応援しています。

Cooperation to an internship

We continue to accept to internship. Furthermore, our chief executive, Emori visits some junior high schools and high school in Yokohama. He tells about media universal design and the essence of “work” passionately. We support young people’s future.

Cooperation with Hamakko future company project

We cooperate with “Hamakko future company project” that Yokohama City Board of Education carries out since this year. It is part of “Education of Making Oneself” promoted by Yokohama City Board of Education. We help a wide-scale education for 4th grade children to make classes with Ooguchidai elementary school in Yokohama.



横浜市立茅ヶ崎中学校「まちの先生」でメディア・ユニバーサルデザインのワークショップ



はまっ子未来カンパニープロジェクトで大口台小の4年生と地域防災について議論

地域ケアプラザへの協力

梅雨時期の食中毒防止を呼びかけるランチョンマットを作成。神奈川県社会福祉協議会を通して、区内の地域ケアプラザなどに配布し、高齢者の食事会などに使っていただきました。

また、六角橋地域ケアプラザと神奈川大学ボランティア部が企画した認知症啓発プロジェクト「オレンジプロジェクト」では、六角橋商店街の飲食店に配布するランチョンマットを制作し寄贈しました。9月21日の世界アルツハイマーデーには、六角橋商店街を中心に、ランチョンマットとしてはもちろん、ポスターとしても掲示されました。

Cooperation to a Community care plaza

We made a place mat to announce to prevent food poisoning in the rainy season. Through Social Welfare Council of Kanagawa Ward, some old person used it at the meeting in the Community care plaza.

Moreover, we helped to make it to hand out restaurants in Rokkakubashi shopping arcade in "Orange project" that enlighten dementia. This project was planed by Community care plaza in Rokkakubashi area and volunteer club in Kanagawa University. It was posted as a poster (of course also as a place mat) in World Alzheimer Day, September 21.



神奈川県社会福祉協議会にて



六角橋地域ケアプラザの原島様と弊社糸谷デザイナー



飲食店以外のお店はポスターとして掲示



六角橋のうどん屋さん「じょんらん」さんにて

9月21日の「全国アルツハイマーデー」にもなぬ、神奈川県社会福祉協議会が主催する9月21日「六角橋商店街」認知症啓発プロジェクトのシンボルカラーである「オレンジ」にちなんで啓発イベントを行った。

9月21日の「世界アルツハイマーデー」にちなみ実施された。六角橋商店街の飲食店を中心に、ランチョンマット50枚、ポスター100枚を配布した。認知症について知ってもらうため、早期発見につながりやすい「目やに」が特徴的な認知症の啓発ポスターを、六角橋商店街の飲食店に配布した。認知症の啓発ポスターは、六角橋商店街の飲食店に配布して、認知症の啓発活動の一環として実施された。

六角橋商店街の飲食店に配布するランチョンマットを制作し寄贈しました。9月21日の世界アルツハイマーデーには、六角橋商店街を中心に、ランチョンマットとしてはもちろん、ポスターとしても掲示されました。

使用、その他の店でも原稿に準じて掲示され、商店街全体がオレンジ色に染まった。

六角橋商店街の飲食店に配布するランチョンマットを制作し寄贈しました。9月21日の世界アルツハイマーデーには、六角橋商店街を中心に、ランチョンマットとしてはもちろん、ポスターとしても掲示されました。

タウンニュース神奈川版

ありがとうの日「感謝を伝えるきっかけに」

毎月10日を“ありがとうの日”として、日頃お世話になっているステークホルダーの皆さまに感謝の気持ちを込め、オリジナルデザイングッズの制作や、地域貢献活動などを行っています。毎月交代で担当チームがアイデアを出し合い、みんなが「嬉しい！ありがとう！」と思えるような楽しい企画を考えています。8月の「ありがとうウォーター」では、オリジナルラベルのミネラルウォーターを配布。暑い中、納品に来てくださった方や運送会社の方々にとっても喜んで頂きました。

ステークホルダーの皆さまとの交差点

2012年11月の創刊から4年。1年に4回の発行を続けてきたJOも、たくさんの方々のご協力によりもうすぐ20号を迎えることができます。2013年からはCSR報告会「ありがトツナイト」の開催も始まり、たくさんの方々のステークホルダーの皆さまに支えられていることを実感しています。これからもみなさまのお役に立つ情報発信に邁進してまいります。

Thanks Day “To be a chance to tell gratitude”

In parallel supporting carrier education to students, we started offering working experiences in order to support physically challenged people to rehabilitate in society. In this year, we accepted a schizophrenic man from employment transfer support facility in Kawasaki. It was nervous because of first experience, but he was pleased. Two employees including the president passed the third grade of welfare examination. We cultivate a better understanding handicapped.

Point of tact with a stake holder

We have published JO 4times a year since November 2012. It'll be published vol.20. Thank you for cooperation to help us. It have started to hold “Arigatonight”, the debriefing session oh CSR, since 2013. It makes us realized that we are supported by many Stakeholders. We will push forward to give some useful information.



2015年度CSR報告会「ありがトツナイト」

ぼうさいえほんプロジェクト

partner 横浜市政策局共創推進室

「小さな命を守りたい」。未就学児向け防災マニュアル「ぼうさいえほん」の配布事業も今年で4年目を迎えます。私たちの呼びかけにご賛同いただいた企業様のご協力により、これまでに12万7千部を発行することができました。

今年3月、東日本大震災から5年目の節目には、市内療育センター、特別支援校など知的障がいや発達障がいを抱える子どもたちが通う施設の、12歳以下の児童を対象に配布し、とても喜んでいただくと共に、各メディアにも多数取り上げていただきました。

最初に配った子供たちも幼稚園を卒業し、当時の年少さんは1年生になりました。熊本地震のあった今年、もう一度幼稚園に戻って子供たちに命の大切さと、まずは自分の身を守ることを伝えていきたいと思えます。

“For saving a small bit of life.” We have hand out “Bousai Ehon” that is a manual for preschool children for 4 years. We published about 127,000 books thanks to companies that agreed with our appeal.

In March 2016, it is 5 years since The Great East Japan Earthquake came, we distributed it to disabled children under 12 years old, who go to sanatorium, special needs education school and a school oh mental disability. They were very glad and we were featured some media.

The first children we handed out the manual graduated from kindergarten and younger children at that time became the first grade at elementary school. Kumamoto earthquake occurred this year, so we will tell the importance of life and saving ourselves to return to kindergarten again.

2015年度配布数一覧

配布先	配布数
特別支援校	528
特別支援級	2,465
地域療育センター	1,800
横浜市保管分	1,207

メディア掲載実績

媒体名	掲載日
東京新聞	2016.3.2
東京新聞 (Web)	
教育新聞 (Web)	
TEAM防災ジャパン (Web)	2016.3.3
タウンニュース神奈川区版 (Web)	2016.3.4
読売新聞	2016.3.5
神奈川新聞	2016.3.19
ローカルグッドヨコハマ (Web)	2016.3.26



左上 2016.3.19 神奈川新聞
左下 2016.3.2 東京新聞
右上 2016.3.5 読売新聞

タツミのえほん部プロジェクト

partner 株式会社タツミプランニング

横浜の未来を担う子供たちの成長を応援するために、企業、学生、教育者が連携し、オリジナル絵本を制作して横浜市内の幼稚園、保育園の子供たちに届ける「タツミのえほん部プロジェクト」。

第2作目となる『ばすたぶふふあんだじい』は昨年度を大幅に上回る11名の学生が集い、公益社団法人横浜市幼稚園協会のご協力のもと、ワークショップやミーティングを何度も行って、みんなが納得する素敵な絵本に仕上げることが出来ました。

鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園での贈呈式では、えほんの読み聞かせや本物の大工道具に触れるワークショップなどを行い、子供たちの歓声を肌で感じる事が出来ました。

“Tatsumi’s picture book project” is hosted by Tatsumi planning and is produced by Kyoshin print that bring original picture books to kindergarten children and nursery school children in Yokohama. We cooperated with companies, students and teachers.

The second work, “Basutabu-fantagii” became a wonderful picture book that all of editors were satisfied with it’s quality because we discussed and held workshops many times cooperated by Yokohama Kindergarten Association, Public Interest Incorporated Association.

In presentation ceremony in Sansyo kindergarten attached by Turumi Junior College, we held a workshop that read fairy tales and touch real carpentry tools. We could feel children’s cheers.



左 三松幼稚園での読み聞かせ会
中上 学生メンバーによるミーティング
中下 大工道具に触れるワークショップ

協働事業

1年生プロジェクト ～新入社員が課題解決に挑戦！～

partner 横浜デジタルアーツ専門学校
神奈川県立産業技術短期大学
相模女子大学

ともにデザイン系専門学校出身であり、学校での学習と現実社会とのギャップを痛感していた新人2人が、デザイン系学生の就職に役立てようと『EtoR for Designers ～デザイナーを目指す学生のための就活ガイド～』を企画・制作しました。

プロジェクトでは県内デザイン系学科のある大学・専門学校のご協力を得て、学校や学生、入社1年目の卒業生にアンケートやインタビューを実施して生の声を集め、自らの経験も加えて、学生たちの就職活動を応援し、さらに印刷会社の魅力も伝えられるツールを作成することを目標にしました。

制作したパンフレットは、県内のデザイン系専門学校等で配布を予定しています。

Two new employees who are from college of design have fully felt a gap between learning in college and real world. They planned and made “EtoR for Designers ~A guide of recruitment for students who aim at a designer~” to help students who want to be a designer with getting a job. They didn't only try to support student's recruitment, but also tell charm of print office to gather real voice in interview to fresh graduates added to their own experiences. They made a booklet and we will distribute it to college of design all over the prefecture and so on.



2016年度新入社員の糸谷泉美(左)と本橋愛加(右)



それぞれの母校を訪ね後輩たちにインタビュー

価値観を共有するしか生き残りの道はない ——CSRで思いを伝える協進印刷

東京財団発行
『CSR白書2016』より抜粋



「印刷屋さんはいへんでしょ」。
いろいろなところで言われてきた。確かにたいへんなこともあるがそんなものじゃない。印刷屋には使命があるんだ、もっと可能性があるんだ——そうした溢れんばかりの思いをどうやって伝えたらよいのだろうか、協進印刷代表取締役社長の江森さんはずっと考えてきた。…〈中略〉…

協進印刷のCSR報告書は2015年で二冊目になる。なんとも温かみのある手触りのよい黄色い表紙を開けば目に飛び込むのは協進印刷の地元の駅前の写真だ。…〈中略〉…

ページをくくると2015年度のインターン学生と江森さんの対談が続く。…〈中略〉… 読めば読むほどに江森さんやインターン生が働く協進印刷の実像が浮かんでくる。…〈中略〉… 誰もが不安に思いながら、少しでも明るい方へ向かって努力を重ねている課題についてのそれぞれの思いが感じられる。…〈中略〉…

インターン生の受け入れは、社会、会社双方にとって大きな意義をもつ。初めて働く若者も、働くことに慣れてしまった社員も、働く意義を見直す機会につながる。社会の声を社員が知るきっかけにもなるし、新しい声は会社を変えるきっかけになる。国際交流も含め、一年で20名以上のインターン生を受け入れている。

多様な働き方を受けとめることができる会社づくりは「日本の労働人口が急激に減ってくるので、どの企業にとっても人材確保は至上命題」（対談での江森さん発言）との問題意識を含め、「短時間正社員」の区分の増加等、法定よりも手厚い規程類を整備し、

正規・非正規・性別に関係なく、ワークライフバランスを向上しやすい制度を整えたという。

短時間正社員の導入は、会社における仕事の進め方にも変革をもたらした。短時間しか会社と一緒にいることができないとなれば、情報共有のやり方の改善も進むし、お互いさまという信頼関係も生まれてくる。それぞれの働き方・生き方を重んじれば、制約が増えてしまいそうだが、実際はそうはならなかったし、むしろ、よい回転をもたらしている。…〈中略〉…

コスト戦略から差別化戦略へ。観念的には理解できるが、どうすればよいのだろうか。あるとき気づいたのが、顧客と自社の価値観の共有、信頼関係の醸成の必要性だ。とはいえ、印刷業は受注型ビジネスで、自分の価値観を出す機会はない。自分の価値観は伝わらない。社会や会社に対する思いを伝えて、価値観を共有する顧客と一緒に仕事ができないものだろうか。そういう思いから2012年、「JO（ジェイ・オー）」を発刊。足元にある材料をうまく使いながら、自分たちの思いを表明する場、クリエイターたちの表現の場として、協進印刷の等身大の姿を伝えてきた。そうした積み重ねを通じて、気がつけば、顧客層が変わってきたという。

変わってきた顧客の一つに「タツミのえほんプロジェクト」がある。自分たちの価値観をわかって一緒に仕事をやりたいと先方が声掛けしてくれる。そんな仕事の形が増えてきている。社会と共に歩む会社の姿がここにある。

各種認定

各種認定

環境に配慮した印刷方法、情報セキュリティへの対策、社会への貢献を継続し、お客様に安心して頂ける会社であり続けることを目指し、各種認定を取得しています。



E3PA 環境保護印刷（クリオネマーク） 認定

2006年2月 認定

<http://www.e3pa.com/>



グリーンプリンティング工場 認定

2007年6月 認定 2016年6月 更新

<http://www.jfpi.or.jp/greenprinting/index.html>



PISM 印刷業情報セキュリティマネジメントシステム 認定

2013年3月 認定

<http://www.kanagawapia.or.jp/pism.html>



横浜型地域貢献企業 認定

2009年3月 認定 2015年3月 更新

<http://www.idec.or.jp/keiei/csr/>



全印工連 CSR ツースター 認定

2015年6月 認定

<http://www.aj-pia.or.jp/csr/main.html>



2016CSR報告書

発 行：株式会社協進印刷

発行日：2016年11月18日

〒221-0003 横浜市神奈川区大口仲町108

TEL.045-431-6611 FAX.050-3730-6273

<http://www.kyoshin-print.co.jp>

見返しの写真について

表：七島不動裏から望む大口の街

裏：大口西公園（通称：ロケット公園）





